図 22　大高城跡（平成元年ごろ撮影）

図 23　丸根砦跡（平成元年ごろ撮影）

力が各地に拠点となる城館を築きました。織田信長の祖父にあたる信貞（信定）は、勝幡（愛西市）に城を築き、当時湊町として栄えた津島をおさえて力を蓄えました。天文 7 年（1538）ごろ、信長の父・信秀は那古野城（中区）を攻略し、本拠地を那古野に移しました。信秀は那古野城に長く留まることはありませんでしたが、同城は信長の全国統一の出発点となりました。

一方、中世における熱田は、この地の土豪加藤家と熱田社の社家（大宮司）である千秋家が実質的に支配していました。中世末には、門前の賑わいとその経済力に目を付けた織田信秀・信長父子が治め、その庇護を受けることになりました。

弘治2 年（1556）、信長は清須城に入り、尾張国内を統一する一方、永禄2 年（1559）には、今川氏が拠点としていた大高城、鳴海城に対抗するため、丸根砦、鷲津砦（いずれも緑区）など複数の砦を築きました。永禄 3 年（1560）、桶狭間の戦いで今川義元を討ち取った信長の名は全国にとどろき、その後、岐阜へ、さらに北陸・近畿へと進出し天下統一の足掛かりを築いていきました。信長が安土に本拠地を移したのちは、嫡子信忠が尾張を治めました。

天正 10 年（1582）、信長が明智光秀に討たれると、山崎の戦いで光秀を破った羽柴秀吉が勢力を強めました。信忠も信長に殉じたため、弟の信雄が尾張を相続し、清須城に入りました。天正 12 年（1584）、小牧・長久手の戦いで徳川家康、織田信雄と講和を結び、信長の後継者としての地位を確立した秀吉は、姓を豊臣と改め、天正 18 年（1590）に天下統一を果たしました。秀吉は甥の秀次に尾張を与えましたが、秀次の失脚後は福島正則が新たに清須城主となっています。秀吉の死後は、慶長 5 年（1600）に関ヶ原の戦いに勝利した家康が天下を引き継ぎました。

伊勢湾に面し、京・鎌倉を結ぶ交通の要衝であった当時の名古屋周辺は、有力氏族の城館が多く築かれ、しばしば争いが発生していました。こうした風土のなかで、信長、秀吉のみならず、二人に重用された前田利家や、信長に仕え、のちに秀吉と敵対することになる柴田勝家、秀吉の重臣として活躍し、名古屋城（中区）築城の際には天守台石

垣の普請を請け負った加藤清正など、数々の有名な武将が生まれています。信長、秀吉に従って尾張を離れる家臣も少なくないなか、生駒氏、兼松氏など尾張に残り、日常的な領国の管理を担っていた武士もいました。彼らは「尾張衆」として近世尾張藩でも引き続き重用されています。

(7) 近　世

関ヶ原の戦い後、家康は豊臣方への備えとして 4 男の松平忠吉に尾張一国を与えました。慶長 12 年（1607)、忠吉が 28　歳の若さで死去すると、弱冠 7 歳で家康の 9 男、義直が忠吉の遺領を継ぎ、初代尾張藩主となりました。尾張藩の拠点は依然として清須にありましたが、沖積低地の自然堤防上に位置していた清須城はたびたび洪水に見舞われ、城域のさらなる拡張・整備も難しい状況となっていました。慶長 14 年（1609)、家康は、名古屋城の築城と清須からの遷府を正式に決定し、翌年から名古屋城築城が始まりました。築城にあたり、家康は豊臣恩顧の大名に助役を命じ、彼らの経済力を弱めるとともに、自らの権威を確かなものにしていきました。同時に、清須から名古屋城へ、住民から寺社、町名も含めた都市ぐるみの計画的移転「清須越（きよすごし）」が行われ、城下町が形成されました。城下町は、主に東側に武家屋敷が並ぶ武家地、その外側に清須から移ってきた寺社を集めた寺社地、南側に「碁盤割（ごばんわり）」と呼ばれる地割で区画された町人地が計画的に配置されました。熱田台地の北端に計画された城と城下町は大規模な河川から離れていたため、名古屋城と熱田の湊を結ぶ運河、堀川が開削されました。

図 24　戦災焼失前の名古屋城天守と本丸御殿（所蔵：名古屋城総合事務所）

尾張藩は、尾張に加え、美濃・信濃・三河・近江・摂津のそれぞれ一部を領地とする約 62 万石の大藩で、広大な濃尾平野や良材に恵まれた木曽の山などを抱えていたことから、実際には石高以上の収入があったといわれています。また、尾張徳川家は、紀伊・水戸の徳川家とともに御三家とされ、将軍家に適当な後継者がいない時などに次の将軍を出す家柄と位置づけられていました。そのなかでも、尾張徳川家は御三家筆頭と目され、高い格式を誇っていました。

義直の跡を継いだ 2 代藩主光友は、万治（まんじ）3 年（1660）の「万治の大火」を機に堀切通を拡幅しました。これが、今日まで残る広小路通の始まりです。光友は、さらに、若宮八幡社(中区)の整備や橘町(中区)の開発など城下町南部の都市計画を積極的に進めました。

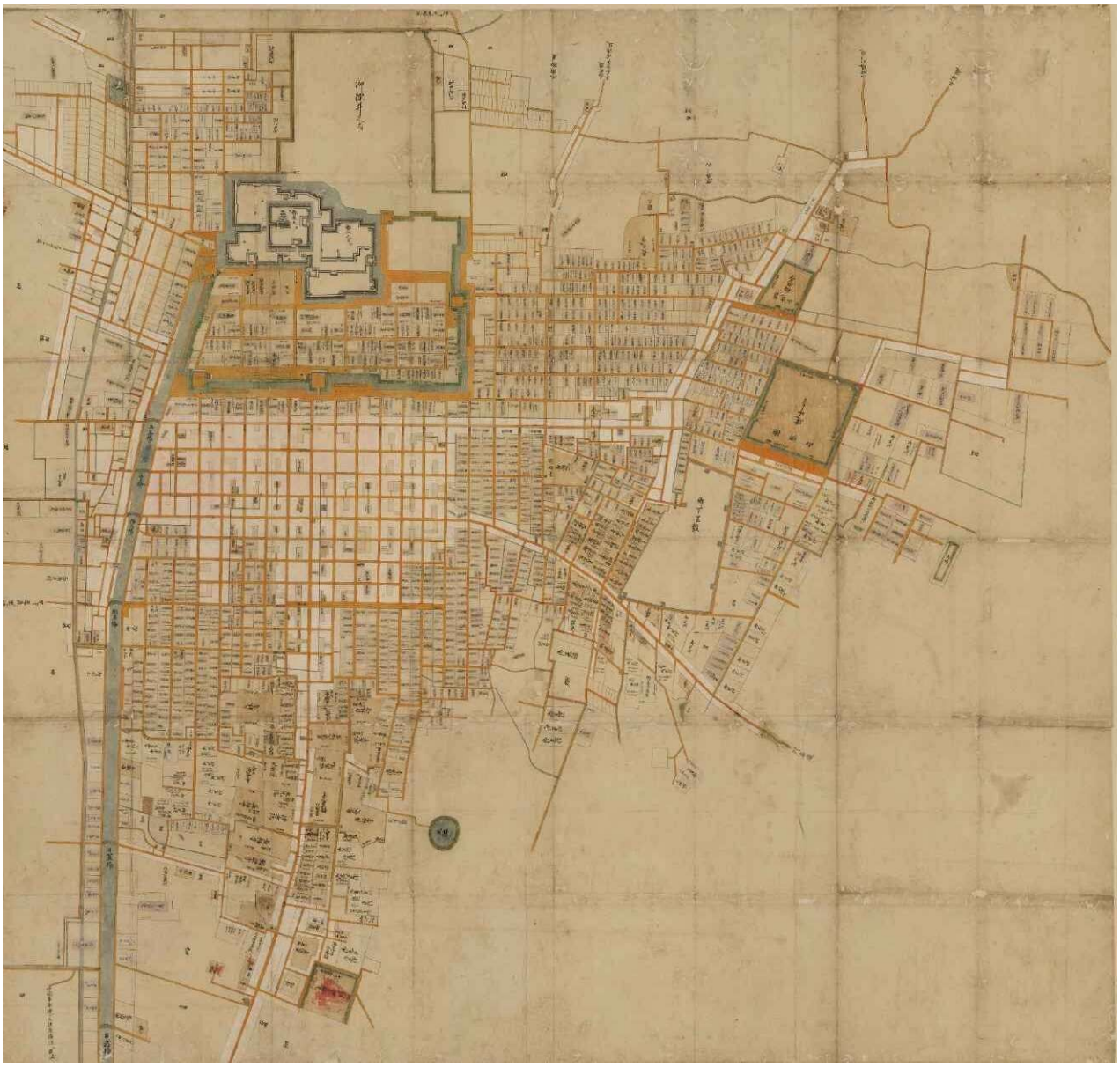

図 25　尾府名古屋図（所蔵：名古屋市蓬左文庫）

芝居の興行権を若宮八幡社などのほか橘町にも認め、南の寺町界隈は、城下の盛り場・歓楽街として発展していきました。城下町の東北部には初代藩主義直が母・相応院（そうおういん）の供養のために建立した相応寺、2 代藩主光友が義直の菩提寺として建立し、歴代藩主の御霊屋（ごれいや）が営まれた建中寺（けんちゅう）など、尾張徳川家の菩提寺が建てられました。城下町にはさまざまな信仰が広まりましたが、天王信仰の三の丸天王社（那古野（なごや）神社）や若宮八幡宮では、山車が登場する盛大な祭礼が行われました。

高い経済力をもち、江戸・京都との中間に位置する名古屋城下では早くから学問や絵画、俳諧などが発達し、やがて尾張独自の文化へと発展していきました。享保 15 年（1730）に 7 代藩主となった宗春は、当時の幕府の緊縮政策（享保の改革）に真っ向から対立し、芝居小屋の増設、遊郭の新設、藩士の芝居見物を許可しました。宗春は、自らも派手な装束で町に繰り出したといわれています。宗春時代の名古屋の繁盛ぶりは『ゆめのあと』

図 26　享元絵巻（所蔵：名古屋城総合事務所）

と総称される一群の書物や「享元絵巻」にみることができます。宗春の失脚後、遊郭の廃止や芝居小屋の営業禁止などにより、名古屋城下は火が消えたような状況になりましたが、19 世紀初頭には芝居興行が復活し、賑わいを取り戻しました。そして、こののち、文化・文政期（1804～1830）にかけて名古屋の町人文化は頂点に達しました。南画、復古やまと絵、浮世絵などさまざまな画派が発展した絵画や俳諧、舞踊など、多様な文化が花開きました。「風月孫助（風月堂）」、「永楽屋東四郎（東壁堂）」などの本屋が名古屋独自の出版物を数多く手がけ、永楽屋東四郎からはこの地に滞在していた葛飾北斎の画譜『北斎漫画』が出版されました。このほか、名古屋周辺の祭り、見世物、事件などを絵入本として記録した尾張藩士高力種信（猿猴庵）などの著作が城下の貸本屋を通じて広く提供されました。また、茶の湯の流行に伴う陶磁器生産や、木曽の良質な木材を用いた箪笥、仏壇、からくり人形製作などの手工業も発達しました。

名古屋城下町でも南端の南寺町の東に接する旧前津小林村一帯（現在の上前津周辺）は不二見原と呼ばれ、眺望がよく、普通の農村とは趣を異にした場所でした。この風光明媚な地に武家や町人の別荘・別宅、隠居所などが建てられ、尾張藩上級武士で俳人でもある横井也有や兵法師範の柳生連也、俳人久村暁台、画家の山田宮常・張月樵・小島老鉄・小田切春江など多くの知識人や文人達が次々に移り住みました。

城下町からは、美濃街道・木曽街道・下街道・岡崎街道など周辺へつながる街道が伸び、城下町の南方 5.5km ほどのところに位置する熱田の町とは本町通（熱田道）で結ばれていました。熱田には東海道の宮宿が置かれましたが、宮宿と伊勢の桑名宿との間は「七里の渡し」と呼ばれる海路となり、陸・海路が交わる物流の拠点として栄えました。同じく東海道の宿場町であった鳴海と、鳴海宿と池鯉鮒宿の間に開かれた有松は特産品として絞り染めを考案し、土産物として買い求める旅行者で大きな賑わいをみせました。

城下町近郊には農村が発達し、町民の生活を支えました。天白川・山崎川流域の丘陵

部では溜池の整備、農地の拡大が進められ、海浜部では、干拓により熱田新田（熱田区・中川区・港区）・茶屋新田（港区）・道徳新田（南区）・込高（こめだか）新田（緑区）など、多くの新田が開発されました。街道周辺の農村では、移り住んできた人々による独自の祭礼行事も発展しました。戸田（中川区）や比良（ひら）（西区）、大森（守山区）など、城下町のように山車を曳く村もある一方、馬の塔、棒の手など尾張・三河に広くみられる祭礼行事が伝わる地域もありました。

図 27　「東海道五拾三次之内　鳴海 名物有松絞」歌川広重
（所蔵：東京富士美術館）

(8) 近　代

18 世紀の終わりごろから、度重なる飢饉や風水害により財政の逼迫（ひっぱく）が顕著となり、嘉永（かえい）2 年（1849）14 代藩主となった慶恕（よしくみ）（慶勝（よしかつ））によって財政再建、海防体制の強化等の藩政改革が進められました。嘉永 6 年（1853）のペリー来航以降、国内は開国派と攘夷派、佐幕派と尊皇派の対立で混乱していましたが、尾張藩は藩祖義直による「王命に依って催さるゝ事」という教えが代々伝えられていたため、御三家の立場にありながら朝廷側に立ち、慶勝の主導で公武合体の体制づくりを進めていきます。

しかし、慶応 4 年（1868）に鳥羽・伏見の戦いが勃発し、新政府と旧幕府の武力衝突が避けられないものとなりました。慶勝はすぐさま佐幕派の重臣らを弾圧して藩内を勤王派に統一し（青松葉（あおまつば）事件）、周辺の諸藩に新政府側につくよう働きかけるなど、新政府軍の江戸城入城を陰で支えました。

明治 2 年（1869）、尾張藩は版籍を奉還し、明治 4 年（1871）には、廃藩置県によって名古屋県となりました。明治 6 年（1873）には、名古屋城本丸、二之丸、三之丸のすべてが陸軍省の所管となり、名古屋鎮台（明治 21 年〈1888〉第三師団と改称）が置かれました。名古屋城の本丸部分は、名古屋離宮として、皇族の宿泊に度々使用されましたが、離宮は昭和 5 年（1930）に廃止され、本丸・西之丸・御深井（おふけ）丸の土地と建物が名古屋市に下賜されました。同年、大天守・小天守・本丸御殿・櫓 4 棟・門 6 棟が国宝に指定され、昭和 6 年（1931）からは、市民に公開されました。翌昭和 7 年（1932）には、本丸・西之丸から外堀等も含めた約 4 万 4 千坪が史跡に指定されました。

明治維新後、名古屋では士族授産・殖産興業政策を受けて繊維・輸出陶磁器・時計製造など近代的な工業が発展しました。明治 19 年（1886）年には武豊～熱田間に鉄道が開通しました。翌年には笹島停車場（現在の名古屋駅）が開設され、明治 22 年（1889）に

東海道線が全線開通しました。

明治 21 年（1888）4 月に公布された「市制・町村制」により、明治 22 年（1889）10 月 1 日、名古屋市が誕生しました。当時の市域は、旧城下町を中心とした東西約 4.93km、南北約 5.45km の範囲で、面積は約 13.34 ㎢と、現在の市域の 4%ほどの大きさでした。

図 28　明治 20 年ごろの名古屋駅
（所蔵：名古屋市鶴舞中央図書館）

近代化が急速に進むなか、明治 24 年（1891）、岐阜県を震源とする濃尾地震が発生し、名古屋市内も現在の中川区・中村区など沖積地を中心に甚大な被害を受けました。尾張紡績工場をはじめ郵便電信局、名古屋電灯会社、名古屋監獄など明治以降に建てられた煉瓦造りの建物も倒壊し、より安全な都市づくりが目指されることとなりました。

図 29　名古屋港
（所蔵：名古屋市鶴舞中央図書館）

明治 31 年（1898）には、京都の伏見線に次いで国内 2 番目となる電気鉄道（笹島～県庁前、当時の愛知県庁は現在の中区役所周辺）が誕生しました。また、明治 33 年（1900）には中央本線の名古屋～多治見間が開通し、千種駅が開業しています。

図 30　第 10 回関西府県連合共進会の様子
（出典：名古屋市博物館収蔵品データベース）

精進川では、明治 37 年（1904）、東京砲兵工廠（こうしょう）熱田兵器製造所建設地を造成するための土砂の確保を兼ねた開削が行われ、明治 43 年（1910）に開通しました。翌年、精進川は新堀川と名称が改められました。さらに、この精進川開削の残土で、明治 42 年（1909）、のちに鶴舞（つるま）公園として整備される第 10 回関西府県連合共進会の会場が造成されました。明治 43 年（1910）に開催された同共進会は産業振興を目的としたもので、明治 40 年（1907）の名古屋港の開港とともに、当時の名古屋の産業を急速に発展させる一大原動力となりました。

本格的な上下水道の整備は、明治末から大正時代にかけて行われました。上水道は、犬山城下の木曽川左岸より水を取り入れる計画が採用され、明治 43 年（1910）から創設

工事に着手し、大正 3 年（1914）に主要部分が完成、同年 9 月 1 日から給水を開始しました。鍋屋上野浄水場は名古屋市に上水道を敷設するにあたって最初に建設された浄水場で、明治 43 年（1910）5 月に着工、大正 3 年（1914）3 月に竣工し、同年 9 月から給水を開始しました。下水道は、明治 41 年(1908)から敷設工事が始まり、大正 12 年(1923)には、旧市域に属する大部分の地域に下水道施設が完成しました。

大正 3 年（1914）に勃発した第一次世界大戦は、我が国に好景気をもたらし、海外輸出が急増していきました。この時期には重工業が勃興し、工業用の作業機や電気機械器具・工作機械が発展するとともに自動車、航空機生産も始まりました。大正 15 年(1926)には中川運河の工事が始まり、昭和 7 年（1932）に運河全体が完成しています。

昭和 12 年（1937）には、名古屋市が主催する名古屋汎太平洋平和博覧会が開催されました。これは日本における最初の国際的博覧会であり、昭和 9 年（1934）に市人口が 100 万人を突破した名古屋市の大都市としての発展を示すものでした。また、同じく昭和 12 年には東山動植物園が開園しています。

しかし、名古屋汎太平洋平和博覧会の直後に日中戦争が勃発し、さらに昭和 16 年(1941)に太平洋戦争が始まると、政府主導で航空機製作関連工場や軍需工場が急速に増設、新設され、中小企業も軍需産業への転換を余儀なくされました。日本有数の大都市であり、軍需工場の密集地でもあった名古屋はたびたび本土空襲の標的となり、東京に次ぐ回数の爆撃を受けています。近世の城下町に始まり、明治、大正、昭和初期と発展を遂げてきた名古屋市街地の大部分は焼け野原となり、市のシンボルとして親しまれてきた名古屋城天守も焼失しました。

(9) 戦　後

空襲により、市街地を中心に当時の市域の約 4 分の 1 が焼失した状況から、名古屋の戦後は始まりました。昭和 20 年（1945)、名古屋市は「大中京再建構想」を発表し、大規模な戦災復興事業に取り掛かりました。名古屋市の戦災復興計画は、東西南北 2 本の 100m道路をはじめとする幹線道路の整備、市街地にあった墓地の東部丘陵への移転（平和公園)、小学校に隣接する公園の設置など、全国的にみても特徴のあるものでした。

図 31　地下鉄の開通

この戦災復興事業により道路や公園、駅前広場などが建設され、名古屋市の都市基盤整備は大きく進みました。また、復興の過程で、日本初の集約電波塔である名古屋

テレビ塔の建設や地下鉄の開通、焼失した名古屋城天守の復元などが行われました。市域南西部の臨海地帯の埋め立て造成も進行し、港湾の整備が進んでいきました。

復興が進む昭和 34 年（1959）9 月 26 日、強い勢力をもつ伊勢湾台風が東海地方に上陸し、暴風雨や高潮による堤防の決壊が、南部の低地を中心に甚大な被害をもたらしました。この教訓から、名古屋港への防波堤・防潮堤の整備や河川改修など、災害に強い都市整備が進められました。

昭和 30 年代を中心に、周辺町村の合併により市域が拡大し、昭和 50 年（1975）には現在の 16 区制となりました。戦時中には人口が 60 万人を下回るまで減少しましたが、戦後の発展とともに再び増加し、昭和 44 年（1969）には 200 万人を突破しました。人口 200 万人突破の記念事業として、昭和 47 年（1972）に名古屋市民会館、昭和 48 年（1973）に国際展示場、昭和 52 年（1977）に名古屋市博物館が開館しました。

経済成長に伴い都市化が進む一方で、伝統的な建造物群を残すための取り組みも生まれました。昭和 58 年（1983）に名古屋市町並み保存要綱が制定され、現在までに有松、白壁（しらかべ）・主税（ちから）・橦木（しゅもく）、四間道（しけみち）、中小田井の 4 地区が町並み保存地区に指定されています。

平成元年（1989）、名古屋市は市制 100 周年を迎えました。100 周年記念事業のメインイベントとして、世界デザイン博覧会が開催され、約 1,518 万人が来場しました。

平成 12 年（2000）に発生した東海豪雨により、市域の広範囲が浸水・洪水の被害を受けたこともあり、21 世紀を迎えると、市民の間にも防災への意識が高まりました。また、平成 14 年（2002）の藤前干潟（港区）のラムサール条約登録や、平成 17 年（2005）に自然の叡智（えいち）をテーマに開催された愛・地球博（日本国際博覧会）、平成 22 年（2010）の生物多様性条約第 10 回締結国会議（COP10）をきっかけに、環境保全に対する取り組みも浸透しています。

平成 22 年（2010）、名古屋は、徳川家康による名古屋城築城から数えて 400 年を迎えました（名古屋開府 400 年）。平成 20 年（2008）から始まった名古屋城本丸御殿の復元工事は平成 30 年（2018）に完了し、武家風書院造の最高傑作といわれた御殿の姿が現代によみがえり、一般公開されています。

図 32　復元された名古屋城本丸御殿

第2章　名古屋市の文化財の概要

1　指定等文化財・未指定文化財の件数

市内において、文化財保護法、愛知県文化財保護条例、名古屋市文化財の保存及び活用に関する条例に基づき指定、登録、選定された文化財の件数は計 495 件（令和 5 年 12 月 1 日現在）です。その内訳は国指定・選定文化財が 145 件、県指定文化財が 109 件、市指定文化財が 127 件、国登録文化財が 114 件です。文化財の類型別では、建造物が最も多く 167 件、次いで美術工芸品の工芸品が 100 件となっています。

次に、未指定文化財は、文化財の各類型でこれまでに実施されている把握調査の進捗状況が異なること、個人が所有する美術工芸品は所在等の把握が難しいことなどの前提が伴いますが、令和 5 年 12 月 1 日現在の文化財リストで把握している件数は 206,020 件です。今後も、把握が不十分な類型を中心に未指定文化財の把握調査を進め、文化財リストの情報を更新していきます。

2　文化財の概要

本市に所在する有形文化財（建造物、美術工芸品）、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群について、指定等文化財を中心に概要や特徴を述べるとともに、指定等文化財、未指定文化財の具体的事例を記載します。また、埋蔵文化財、文化財の保存技術についても合わせて概要を記述します。

（1）有形文化財（建造物）

国の重要文化財が 13 件、県指定有形文化財が 12 件、市指定有形文化財が 29 件の計 54 件が文化財指定されているほか、国登録有形文化財が 113 件あります。

表 8～10 に、国の重要文化財、県・市指定有形文化財、国登録有形文化財を、近世以前と近代以降に分けて、建物の種類ごとに整理しました。なお、表 8 の近世以前の建造物には、戦災により 1945 年に焼失した旧国宝のもの（焼失文化財）も合わせて掲載しています。

焼失文化財に掲載している、名古屋城（大天守・小天守など）（中区）をはじめとする 9 件に代表されるように、太平洋戦争中の度重なる大空襲で市域の建物面積の約 40％が焼失し、数多くの歴史的建造物が失われています。

国・県・市の指定文化財 54 件のうち、約 2/3 の 37 件が近世以前のものですが、国の

表 6　指定等文化財の件数（令和 5 年 12 月 1 日現在）

類　型			国指定 国選定	県指定	市指定	国登録	県登録	合　計
有形文化財	建造物		13	12	29	113	0	167
	美術工芸品	絵　画	15	17	12	0	0	44
		彫　刻	5	9	7	0	0	21
		工芸品	50(2)	41	9	0	0	100
		書跡・典籍	44(4)	18	0	0	0	66
		古文書	4			0		
		考古資料	1	6	3	0	0	10
		歴史資料	3	4	4	0	0	11
無形文化財			1	0	2	0	0	3
民俗文化財	有形の民俗文化財		0	0	18	0	0	18
	無形の民俗文化財		0	2	33	0	0	35
記念物	遺　跡		6(1)	0	6	0	0	12
	名勝地		1	0	1	1	0	3
	動物・植物・地質鉱物		1	0	3	0	0	4
文化的景観			0	—	—	—	—	0
伝統的建造物群			1	—	—	—	—	1
合　計			145	109	127	114	0	495

※美術工芸品の括弧内の数は国宝の件数、遺跡の括弧内の数は特別史跡の件数を表す

表 7　未指定文化財の把握件数（令和 5 年 12 月 1 日現在）

類　型			件　数	類　型		件　数
有形文化財	建造物		805	無形文化財		17
	美術工芸品	絵　画	6,332	民俗文化財	有形の民俗文化財	12,652
		彫　刻	397		無形の民俗文化財	125
		工芸品	7,227	記念物	遺跡	924
		書跡・典籍	146,219		名勝地	16
		古文書			動物・植物・地質鉱物	265
		考古資料	4,619	文化的景観		0
		歴史資料	23,361	伝統的建造物群		6
石造物						738
合　計						206,020

表8　建造物指定・登録等一覧（近世以前）

分類		国指定	県指定	市指定
近世以前	神社	富部神社本殿（南区）1957	東照宮社殿（中区）1960	富部神社祭文殿及び廻廊（南区）1996
	寺院	観音寺多宝塔（中川区）1921 竜泉寺仁王門（守山区）1928 興正寺五重塔（昭和区）1982	瑞泉寺総門（緑区）1957 建中寺徳川家霊廟（東区）1960 草結庵（千種区）1963	建中寺　総門・三門・鐘楼・御成門（東区）1985 勝鬘寺（中区）1986 建中寺本堂・経蔵（東区）1999 建中寺開山堂および源正公（徳川光友）廟（東区）2000 本願寺名古屋別院 鐘楼（中区）2017 笠覆寺（南区）2017
	城郭	名古屋城（中区）1930 西南隅櫓、東南隅櫓、西北隅櫓、表二の門 名古屋城二之丸大手二之門（中区）1975 名古屋城旧二之丸東二之門（中区）1975		風信亭（西区）1973 余芳亭（中区）1973
	住宅		暮雨巷（瑞穂区）1963 旧渡辺家書院及び茶室（昭和区）1981	旧志水家玄関車寄せ（西区）1973
	民家		井桁屋（服部家住宅）（緑区）1964 伊藤家住宅（西区）1987 服部幸平家住宅　倉（緑区）1987	薬草倉（瑞穂区）1973 旧旅籠屋「伊勢久」（熱田区）1984 岡家住宅（緑区）1987 小塚家住宅（緑区）1992 竹田家住宅（緑区）1995
	その他		無縫塔（守山区）1964	宗円寺宝篋印塔（昭和区）1973 宝生院開山塔（天白区）1973 宝生院中興開山印雅上人逆修塔（天白区）1973 光音寺無縫塔（北区）1973 須弥壇（中川区）1978

分類		国登録	焼失文化財（旧国指定）
近世以前	神社	朝日神社透塀（蕃塀）（中区）2022	東照宮社殿（中区）1930 熱田神宮海上門（熱田区）1920 熱田神宮鎮皇門（熱田区）1928
	寺院	長母寺庫裡（東区）1999 長母寺山門（東区）1999 春江院本堂（緑区）2005 春江院本玄関及び書院（緑区）2005 春江院山門（緑区）2005 春江院鐘楼（緑区）2005 崇覚寺本堂（中区）2015 蓮教寺本堂（名東区）2017 蓮教寺書院（名東区）2017 蓮教寺庫裏（名東区）2017 蓮教寺山門及び脇塀（名東区）2017 梵音寺本堂（名東区）2017 真宗大谷派名古屋別院東門及び土塀（中区）2018 善行寺本堂（中川区）2018 善行寺玄関座敷（中川区）2018 善行寺太鼓楼（中川区）2018 善行寺山門（中川区）2018	七寺本堂（中区）1910 高岳院本門（東区）1920 性高院表門（千種区）1920 本遠寺楼門（熱田区）1921
	城郭		名古屋城（中区）1930 大天守、小天守ほか20棟 猿面茶屋（昭和区）1937
	住宅	神谷家住宅柏露軒（中区）2012 神谷家住宅孤蓉（中区）2012	
	民家	又兵衛（旧坂上家住宅）（熱田区）2001 萬乗醸造主屋（緑区）2007 萬乗醸造中蔵（緑区）2007 萬乗醸造内井戸（緑区）2007 萬乗醸造旧仕込蔵及び樽修理場（緑区）2007 筧家住宅主屋（中村区）2013	
	その他		

※分類は、国宝・重要文化財（建造物）の分類に拠る　　※各建造物の末尾の数字は、指定、登録された年を表す
※焼失文化財は、戦災により昭和20年（1945）に焼失した旧国宝の建造物で、括弧内には焼失時に所在した場所の現在区を記載

表９　建造物指定・登録一覧（近代以降）(1)

分類		国指定	県指定	市指定	国登録
近代以降	産業二次				萬乗醸造旧精米作業場（緑区）2007 萬乗醸造瓶詰作業場（緑区）2007 萬乗醸造元蔵（緑区）2007 萬乗醸造新蔵（緑区）2007 萬乗醸造白米倉庫（緑区）2007 萬乗醸造外井戸（緑区）2007
	産業三次	八勝館（昭和区）2020 名古屋テレビ塔（中区）2022		熱田荘（熱田区）1985	建中寺徳興殿（旧名古屋商業会議所本館）（東区）2000 旧加藤商会ビル（中区）2001 料亭河文主屋（中区）2005 料亭河文表門、塀及び脇門（中区）2005 料亭河文新用亭及び渡廊下（中区）2005 料亭河文用々亭（中区）2005 料亭河文厨房（中区）2005 中濱家住宅主屋（緑区）2008 中濱家住宅土蔵（緑区）2008 中濱家住宅物置（緑区）2008 中濱家住宅門（緑区）2008 中濱家住宅石垣及び塀（緑区）2008 名古屋陶磁器会館（東区）2008 棚橋家住宅主屋（緑区）2009 日本陶磁器センター旧館（東区）2015 日本陶磁器センター新館（東区）2015
	交通			松重閘門（中川区）1986	名古屋港跳上橋（旧１・２号地間運河可動橋）（港区）1999
	官公庁舎	旧名古屋控訴院地方裁判所区裁判所庁舎（東区）1984 名古屋市庁舎（中区）2014 愛知県庁舎（中区）2014			
	学校				愛知学院大学楠元学舎第１号館（千種区）1998 東海学園大講堂（東区）1998 南山学園ライネルス館（昭和区）1998 金城学院高等学校榮光館（東区）1998 名古屋大学医学部附属病院門及び外塀（旧愛知県立医学専門学校正門及び外塀）（昭和区）2007 名古屋大学豊田講堂（千種区）2011 愛知県立旭丘高等学校正門門柱（旧愛知県立第一中学校正門）（東区）2017 愛知県立瑞陵高等学校旧正門門柱（旧愛知県商業学校正門）（瑞穂区）2017 愛知県立惟信高等学校正門門柱（旧愛知県惟信中学校正門）（港区）2017 愛知県立瑞陵高等学校感喜堂（旧講堂）（瑞穂区）2022
	生活関連			鶴舞公園噴水塔（昭和区）1986 鶴舞公園普選壇（昭和区）1986 鍋屋上野浄水場　旧第一ポンプ所（千種区）2012 東山配水場　旧計量室（千種区）2012	道徳公園クジラ池噴水（南区）2021
	文化施設	名古屋市東山植物園温室前館（千種区）2006			徳川美術館本館（東区）1997 徳川美術館南収蔵庫（東区）1997 龍影閣（旧名古屋博物館品評所）（熱田区）2001 蘇山荘（東区）2014 中村公園記念館（中村区）2017 名古屋市公会堂（昭和区）2020
	福祉施設				名古屋大学医学部附属病院門及び外塀（旧愛知県立愛知病院正門及び外塀）（昭和区）2007 名古屋大学医学部附属病院門及び外塀（旧愛知県立愛知病院通用門及び外塀）（昭和区）2007

※分類は、国の登録有形文化財（建造物）の分類を一部変更　　※各建造物の末尾の数字は、指定、登録された年を表す

表 10　建造物指定・登録一覧（近代以降）(2)

分類		国指定	県指定	市指定	国登録
近代以降	住宅		旧藤山家住宅日本家（龍興寺客殿）（昭和区）1979	井元家住宅（東区）1996 揚輝荘（千種区）2008	旧川上貞奴邸主屋（東区）2005 旧川上貞奴邸蔵（東区）2005 萬乗醸造離れ（緑区）2007 萬乗醸造土蔵（緑区）2007 石原家住宅主屋（北区）2011 神谷家住宅腰掛待合（中区）2012 神谷家住宅中潜門（中区）2012 名古屋市東山荘主屋（瑞穂区）2013 名古屋市東山荘正門及び塀（瑞穂区）2013 名古屋市東山荘庭門及び塀（瑞穂区）2013 徳川園黒門（東区）2014 徳川園脇長屋（東区）2014 徳川園塀（東区）2014 徳川園釣瓶井戸（東区）2014 徳川美術館山の茶屋（東区）2014 徳川美術館心空庵及び餘芳軒（東区）2014 徳川美術館餘芳軒東屋（東区）2014 蓬左文庫旧書庫（東区）2014 鈴木家住宅主屋（昭和区）2015 中村公園豊頌軒（中村区）2017 爲三郎記念館爲春亭（千種区）2018 爲三郎記念館知足庵（千種区）2018 爲三郎記念館待合（千種区）2018 爲三郎記念館雪隠（千種区）2018 爲三郎記念館正門（千種区）2018 爲三郎記念館東門（千種区）2018 川原田家住宅主屋（昭和区）2020 川原田家住宅表門及び塀（昭和区）2020 川原田家住宅裏門及び塀（昭和区）2020 川原田家住宅石垣（昭和区）2020
	宗教		日泰寺奉安塔（千種区）1987	日泰寺大書院鳳凰台（千種区）1999	長母寺本堂（東区）1999 春江院不老閣（緑区）2005 春江院茶室（緑区）2005 春江院庫裏（緑区）2005 カトリック主税町教会信者会館（東区）2011 カトリック主税町教会司祭館（東区）2011 カトリック主税町教会煉瓦塀（東区）2011 日本福音ルーテル復活教会（東区）2012 名古屋カテドラル聖ペトロ聖パウロ大聖堂（東区）2015 蓮教寺鐘楼（名東区）2017 善行寺鐘楼（中川区）2018 善行寺手水舎（中川区）2018 七所神社本殿（南区）2018
	軍事				乃木倉庫（中区）1997
	その他				オリエンタルビル屋上観覧車（中区）2007

※分類は、国の登録有形文化財（建造物）の分類を一部変更
※各建造物の末尾の数字は、指定、登録された年を表す

重要文化財については近世以前のものが 7 件、近代以降のものが 6 件とほぼ同数となっています。近代以降のものは、旧名古屋控訴院地方裁判所区裁判所庁舎（東区）の 1 件を除き 2001 年以降の指定で、近年における建造物の国指定の動向を反映しています。

指定文化財について、種別でみると、近世以前の寺院が最も多く 12 件あります。天文 5 年（1536）再建の観音寺多宝塔（中川区）が唯一中世にさかのぼり、そのほかのものは 17 世紀以降に建てられたものです。近世以前の建造物が残る大寺院は、建中寺（東区）、興正寺（昭和区）、龍泉寺（守山区）、笠覆寺（南区）、瑞泉寺（緑区）などの建造物が文化財指定されており、未指定の寺院に相応寺（千種区）などがあります。寺院に対し

て、近世以前の神社の建造物で文化財指定されているものは多くありません。市内の神社のうち、最も重要な熱田神宮（熱田区）は、戦前には、元亀2年（1571）に織田信長が熱田社（現熱田神宮）を造営した際のものとされる海上門、慶長5年（1600）に加藤清正が造営した鎮皇門が旧国宝に指定されていましたが、残念ながら戦災で焼失しています。

指定文化財の種別で、近世以前の寺院に次ぐ数の8件が指定されている近世以前の民家は、県指定有形文化財の井桁屋（服部家住宅）と服部幸平家住宅倉、市指定有形文化財の岡家住宅、小塚家住宅、竹田家住宅の5件が有松（緑区）の絞商家の建築物です。有松の絞商家は、ほかに中濵家住宅、棚橋家住宅が国登録有形文化財になっています。後述するように、有松は市の町並み保存地区に指定されているとともに、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されていますが、ほかに町並み保存地区に指定されている白壁・主税・橦木（東区）では井元家住宅が市指定、旧川上貞奴邸が国登録を受けており、四間道（西区）では伊藤家住宅が県指定を受けています。

指定文化財で、近世以前の城郭、住宅に分類されるもののなかには茶室・茶屋が複数あり、戦前に旧国宝指定されていたもののなかにも、織田信長が清須城内に造らせ、名古屋城築城に際して二之丸御殿内に移築された猿面茶屋（焼失時には現在の昭和区鶴舞公園内に所在）があります。

指定文化財の近代以降のものをみると、西洋的な建築様式に日本的な要素を取り入

図33　名古屋城東南隅櫓

図34　伊藤家住宅

図35　名古屋市庁舎

図36　東山植物園温室前館

れた大型庁舎建築の名古屋市庁舎（中区）、日本における最初期の全溶接建築物として建築技術史上高い価値をもつ名古屋市東山植物園温室前館（千種区）、郊外に建築され、意匠に優れた多数の建造物で構成される料理旅館の八勝館（昭和区）、財界人の別荘であった揚輝荘（千種区）は、近代名古屋の発展を物語るものといえます。また、近年、名古屋テレビ塔（中区）が戦後の建造物としては本市で初めて国の重要文化財に指定されました。

図 37　名古屋テレビ塔

今後、指定・登録の検討が必要と考えられる建造物の種別として、名古屋の歴史文化の特徴である輸出陶磁器業や紡織業などの近代工業に関係する建造物（ノリタケの森、トヨタ産業技術記念館に残る建造物など）、現在乃木倉庫（中区）の 1 件のみが国登録されている近代の軍事関係の建造物、近代以降の交通施設のうち橋梁や庄内用水元杁樋門（守山区）などの土木構造物が挙げられます。

また、景観法に基づき指定されている景観重要建造物、名古屋市都市景観条例に基づき指定されている都市景観重要建築物、同条例に基づき認定されている認定地域建造物資産に含まれる建造物は、既に指定・登録文化財となっているものを除き、今後の指定・登録の候補となり得るものです。

（2）有形文化財（美術工芸品）

① 絵　画

国の重要文化財が 15 件、県指定有形文化財が 17 件、市指定有形文化財が 12 件の計 44 件が文化財指定されています。

本市の寺社には多くの宗教画が伝わっています。平安時代末に制作され、聖徳寺が所蔵する『絵因果経（巻二断簡）』は、釈迦の伝記を説く経文に絵が加えられたものの断簡で、七寺（中区）の『七寺一切経』より出たものと伝えられます。真福寺宝生院（大須観音）（中区）の『仏涅槃図』はほかの涅槃図にはみられない珍しい要素を多くもつ重要な作例で、護国院（北区）の『千手観音二十八部衆像』は京都府智積院本と図像が細かなところまで一致し、図像及び様式・技法の点で大変優れています。寺社に伝来するのは宗教画だけではなく、地蔵院（熱田区）の『騎馬武者像』、願王寺（西区）の『伝織田又六像』、総見寺（中区）の『織田信長像』といった肖像画も資料的に貴重です。また、総見寺（中区）の『旧清須城障壁画』のようにほかの建造物にあった絵画作品が場所を

移して保存されている事例もあります。

尾張徳川家は『源氏物語絵巻』をはじめ多くの貴重な絵画を収集しており、現在徳川美術館（東区）に伝来しています。

図 38　名古屋城旧本丸御殿障壁画　桜花雉子図
（所蔵：名古屋城総合事務所）

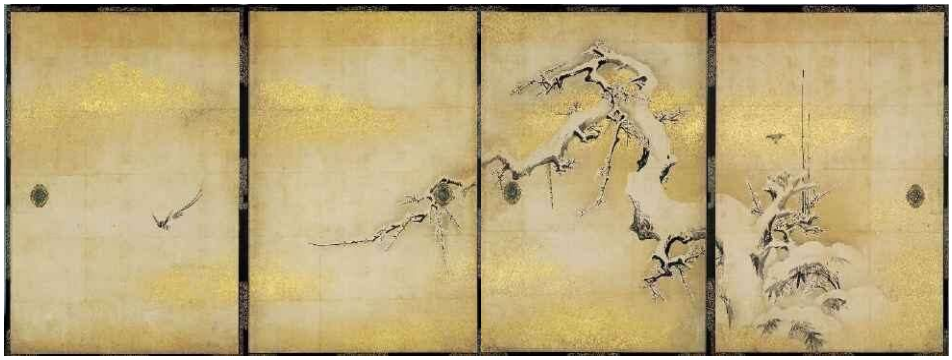

図 39　名古屋城旧本丸御殿障壁画　雪中梅竹鳥図（所蔵：名古屋城総合事務所）

名古屋城旧本丸御殿の障壁画がまとまった形で現存していることは全国的に特記されます。元和（げんな）元年（1615）に完成した表書院・対面所・玄関などの障壁画には、狩野貞信（かのうさだのぶ）を中心に制作された『四季花鳥図』、『名所景物図』、『風俗画』が描かれています。一方、寛永 11 年（1634）の将軍家光の上洛に合わせて増築された上洛殿は、上段之間・一之間の水墨画の『帝鑑図』、二之間の『琴棋書画図（きんきしょがず）』、三之間の『四季花鳥図』が狩野探幽（かのうたんゆう）を中心に制作されています。三之間の『雪中梅竹鳥図』は探幽の傑作に数えられます。これら上洛殿の障壁画は、探幽による新しい絵画様式と美意識が初めて示され、これ以降の江戸狩野派はもちろん近世絵画の展開に大きな影響を与えました。

江戸時代半ばの南画（日本文人画）の先駆者の一人、彭城百川（さかきひゃくせん）を誕生させた名古屋は、尾張南画と呼ばれる名古屋独自の画派を生み、山本梅逸（やまもとばいいつ）（名古屋市博物館所蔵『四季花鳥図屏風』など）、中林竹洞（なかばやしちくどう）といった多士済々の画家がこの地方から全国で活躍しました。

図 40　四季花鳥図屏風　山本梅逸筆
（出典：名古屋市博物館収蔵品データベース）

復古やまと絵派の田中訥言（徳川美術館所蔵『百花百草図屏風』など）、渡辺清などの作品も多くこの地方に残っています。

また、版元永楽屋は名古屋に葛飾北斎を招いて『北斎漫画』を発行するなど、全国の著名な画家がこの地に足跡を残しています。

② 彫　刻

国の重要文化財が 5 件、県指定有形文化財が 9 件、市指定有形文化財が 7 件の計 21 件が文化財指定されています。

名古屋中心部は名古屋城築城に合わせて成立した新興都市で、城下町の寺院の多くは清須越など外部から移転したり、新たに建立されたりしたものです。また、太平洋戦争時の空襲により焼亡しているため、市の中心部に残る古い仏像は多くはありません。そのなかで七寺の『観音菩薩坐像及勢至菩薩坐像』は空襲で中尊である阿弥陀如来像などを失ったものの、平安時代の巨像が残った貴重な例です。中世以前の仏像は郊外に伝来するものが多く、笠覆寺の『十一面観音菩薩立像』、成願寺（北区）の『十一面観音菩薩立像』などがあります。

図 41　龍泉寺の円空仏

この地方では中世に銅・鉄で鋳造された仏像が多いのも特徴です。青大悲寺（熱田区）の『鋳鉄地蔵菩薩立像』、観聴寺（熱田区）の『鋳鉄地蔵菩薩立像』が県の有形文化財に指定されています。江戸時代には興正寺に銅造の『大日如来坐像』が作られました。

また、江戸時代前期に活躍した円空は、全国におよそ 5,350 体の円空仏と呼ばれる像を残していますが、名古屋には 1,900 体近くが伝わっています。観音寺（中川区）、龍泉寺といった寺院以外にも、旧家の持仏や神社の御神体として伝わったものもあります。石造仏には文化財指定されたものはありませんが、地域の人々に守り伝えられてきた仏像が多数残されています。

そのほか、熱田神宮で用いられていた面にも、古くは平安時代に制作されたものが伝存しており、木造『舞楽面』が重要文化財、『神事面』が県の有形文化財に指定されています。

図 42　木造舞楽面　陵王
（鎌倉時代・重要文化財）
（所蔵：熱田神宮）

図 43　木造舞楽面　陵王
（江戸時代）
（所蔵：熱田神宮）

③ 工芸品

国宝が 2 件、国の重要文化財が 48 件、県指定有形文化財が 41 件、市指定有形文化財が 9 件の計 100 件が文化財指定されています。

熱田神宮には数多くの美術工芸品が奉納されています。『短刀　銘来国俊　正和五年十一月日』が国宝に指定されているほか、多くの刀剣や古神宝類が重要文化財、平安時代の『瑞花双鳳文八稜鏡』などが県の有形文化財に指定されています。

また、『駿府御分物』として伝えられた徳川家康遺愛の品など、尾張徳川家に関連する美術工芸品が徳川美術館などに収蔵されています。

図 44　真宗大谷派名古屋別院梵鐘

刀剣は室町時代以前に作られた古刀の名品が熱田神宮と徳川美術館に収められています。江戸時代には名古屋城下でも多くの刀鍛冶が活動し、政常・氏房・信高の三家がその代表とされます。彼らの作は全国的に評価が高く、尾張藩士の家に伝わるほか他地方にも伝来します。鐔などの刀装具もこの地方の特色があり、尾張透鐔、尾張拵などと呼ばれます。

鋳物は尾張藩の鋳物師頭を代々務めた水野太郎左衛門家が代表的で、性高院（千種区）と真宗大谷派名古屋別院（中区）の『梵鐘』が市の有形文化財に指定されています。

陶磁器は、名古屋市博物館（瑞穂区）に、重要文化財の『古瀬戸黄釉魚波文瓶』、県指定有形文化財の『灰釉魚波文四耳壺』など県内外から集められた中世瀬戸窯の優品が数多く収蔵されています。市内に伝わっていたものでは、伊勝八幡宮（昭和区）に奉納された瀬戸の『陶製狛犬』のうち 3 点が県・市指定有形文化財となっています。

名古屋は東海地方で最も早く窯業生産（須恵器生産）が開始された場所で、現在に至るまで窯業が盛んです。名古屋で制作された焼きもので造形的に優れたものの一つとして、江戸時代に、尾張藩主が瀬戸の陶工を招いて名古屋城内で作陶させた御深井焼が挙げられます。同時代には、藩士・町人の間でも陶芸が流行し、豊楽焼、笹島焼などが知られています。現代に至るまで茶道の盛んな地域であり、尾張徳川家が所蔵した名品の茶碗・茶道具は徳川美術館に残されています。旧家や数寄者と呼ばれる茶道愛好家により多くの名品が収集され、例えば森川如春庵の収集した本阿弥光悦作『黒楽茶碗（時雨）』は名古

図 45　短刀　銘　来国俊
（所蔵：熱田神宮）

屋市博物館に伝わっています。昭和美術館・桑山美術館など数寄者が収集した茶道具専門の美術館もあります。

④ 書跡・典籍

国宝が4件、国の重要文化財が40件、県指定有形文化財が18件の計62件が文化財指定されています。なお、県指定有形文化財はのちに記述する古文書も含めた指定となっています。

図46　古事記　賢瑜筆
（所蔵：大須観音宝生院〈真福寺〉）

真福寺宝生院（大須観音）の大須文庫には約1万5千点に及ぶ書物が納められています。そのうち『古事記　賢瑜筆』、『漢書食貨志第四』、『瑚玉集巻第十二、第十四』、『翰林学士詩集』の4点が国宝、『日本霊異記　巻中・下』、『倭名類聚抄』などが重要文化財、「『因明三十三過記』紙背文書」が県の有形文化財に指定されています。なかでも『古事記』は現存最古の写本として著名です。また「『因明三十三過記』紙背文書」は、鎌倉期の禅僧として著名な栄西の自筆書状です。

このほか、寺社関係の資料として、熱田神宮が所蔵するものでは、『熱田神宮踏歌祭頌文』、『紺紙金字般若心経』、『熱田神宮馬場家文書』などが県の有形文化財に指定されています。また、重要文化財に『七寺一切経』、県指定有形文化財に『笠覆寺文書』、『尾張円福寺文書』などがあります。

尾張徳川家の旧蔵書を所蔵する蓬左文庫（東区）には、『続日本紀（金沢文庫本）』、『源氏物語（河内本）』、『宋版太平聖恵方』、『朝鮮版高麗史節要』など7件の重要文化財があります。蓬左文庫は、徳川家康の死後、尾張徳川家初代義直（家康九男）が譲り受けた家康の旧蔵書「駿河御譲本」をはじめ、同家歴代が収集した書物、尾張藩が編纂した書物、藩士が献上した書物などを所蔵しており、全国有数の大名文庫として知られます。指定文化財以外にも、尾張藩が編纂した『張州雑志』、『張州府志』、『尾張志』といった地誌、尾張藩士の奥村得義が藩命により名古屋城の故事来歴をまとめた『金城温古録』など、この地域の基本的な歴史資料となる書物を所蔵しています。

また、文化財指定されているものはありませんが、江戸時代後期の名古屋城下には数多くの本屋・貸本屋が営まれており、葛飾北斎の画譜『北斎漫画』など、名古屋独自の出版物も生まれました。尾張藩士高力種信（猿猴庵）は名古屋周辺の祭り、見世物、寺院の開帳などを記録した絵入本を多く残しており、名古屋市博物館が収集・公開を進めています。幕末から明治にかけては小田切春江らが地誌『尾張名所図会』を著すなど、城下の文化人による当時の記録が豊富に残されています。

⑤ 古文書

国の重要文化財に、真福寺宝生院所蔵の『尾張国解文残巻』、熱田神宮所蔵の『後花園天皇宸翰御消息』、長母寺（東区）所蔵の『無住道暁筆文書』があります。

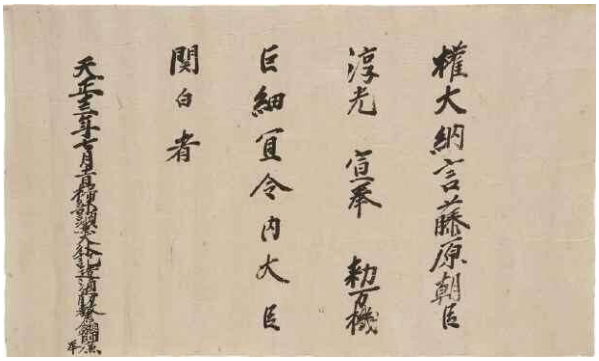

図 47　宣旨（関白）　豊臣家文書
（所蔵：名古屋市博物館）

また近年、豊臣秀吉の正室高台院（北政所、寧）の兄を祖とする足守藩木下家に伝わった重要文化財「豊臣家文書（六十七通）」が、名古屋市の所蔵となりました。このなかには秀吉の関白任官に関係する口宣案、宣旨、位記などが含まれており、無官から関白まで上り詰めた秀吉の道程を裏づける最も基礎的な資料といえます。このほかにも高台院をはじめ、秀吉の甥の秀次、高台院の甥の小早川秀秋など、秀吉の近親者にかかわる古文書も多く含まれ、一族を中心とする豊臣政権の実像を伝える一次資料としても貴重です。

⑥ 考古資料

国の重要文化財が 1 件、県指定有形文化財が 6 件、市指定有形文化財が 3 件の計 10 件が文化財指定されています。

市内出土の考古資料では、現在熱田神宮が所蔵し、熱田付近で出土したと考えられている金銅装の馬具が県の有形文化財、桜田貝塚（南区）から出土した弥生時代の魚形土器、大須二子山古墳（中区）の出土品が市の有形文化財に指定されています。文化財指定されているもののほかにも、市内の発掘調査では、平手町遺跡（北区）の舟形木棺、伊勢山中学校遺跡（中区）の鉄鋌、H-G-8 号窯（千種区）の瓦塔をはじめとする猿投窯の生産品など、数多くの貴重な資料が出土しています。

図 48　大須二子山古墳出土品
（所蔵：南山大学人類学博物館・
名古屋市博物館）

また、名古屋市博物館（瑞穂区）には重要文化財に指定されている福井県出土の袈裟襷文銅鐸、県の有形文化財に指定されている岩倉市出土の弥生土器の壺、岡崎市の古墳出土の横矧板鋲留短甲など、市外から出土した優品も所蔵、保管されています。

⑦ 歴史資料

国の重要文化財が3件、県指定有形文化財が4件、市指定有形文化財が4件の計11件が文化財指定されています。

県指定有形文化財の水野家文書、尾張藩領産物帳、市指定有形文化財の横井也有関係資料、伊藤圭介関係資料、兼松家資料、近江木下家資料は、尾張藩及び名古屋市にゆかりのある人物に関連した資料です。伊藤圭介関係資料は、名古屋出身の本草学者である伊藤圭介の遺品などで構成されます。兼松家資料は、織田信長、豊臣秀吉、徳川義直らに仕えた兼松正吉が拝領した朱印状などが含まれます。近江木下家資料は、秀吉の正室高台院の遺品を中核とし、秀吉自筆、秀吉所持・所用の確かな一級資料が多数含まれます。

図49　伊藤圭介関係資料（安喜多富貴印葉図）
（所蔵：名古屋市東山動植物園）

愛知県図書館（中区）には、県指定文化財の「尾張国絵図」、「三河国絵図」など、江戸時代に作成された各地の絵図が所蔵されています。また、名古屋大学附属図書館（千種区）が所蔵する交代寄合西高木家関係資料は令和元年（2019）に重要文化財に指定されました。美濃国時郷・多良郷を知行所とした旗本西高木家に伝来した資料群で、特に、当時洪水が頻発していた木曽三川の治水に関する資料が豊富に残されています。

そのほか、リニア・鉄道館（港区）に所蔵されているホジ6014号蒸気動車、鉄道省営乗合自動車が重要文化財に指定されています。

(3) 無形文化財

① 芸　能

尺八が国の重要無形文化財に指定されており、本市在住の野村正也氏がその保持者として認定されています。また、香道の志野流香道、雅楽の催馬楽桜人の2件が市の無形文化財に指定されています。

江戸時代、尾張藩では歴代藩主の多くが文化や学問の振興に取り組みました。それぞれの道の第一人者を京から迎え、召し抱えたことによって、さまざまな文化活動が活発になり、町人の間にも広まりました。常設の芝居小屋がいくつも設けられ、「芸どころ」と呼ばれるようになりました。

香　道　香道の流派の一つである志野流は、現在名古屋を本拠とし、市の無形文化財に指定されています。志野流は、室町時代中期に、足利義政の知遇を得た志野宗信が創

始し、以後京都において継承されました。幕末になって、15世蜂谷宗意が幕末の騒乱を避けるため名古屋に移り住み、現在に継承されています。志野流には歴代の家元が考案した多くの「組香」が伝えられ、源氏香、三景香などをはじめ、およそ250組の組香が保存され、香道に必要な道具類（十種香箱など）が伝えられています。

図50　志野流香道

雅　楽　催馬楽桜人が市の無形文化財に指定されています。また、熱田神宮や東照宮（中区）では年中行事として舞楽が奉納されています。

踏歌神事　踏歌神事は1月11日、熱田神宮で行われます。詩頭、陪従、笛役、高巾子・舞人・雁使の神職が祭員となり、年頭に五穀豊穣を祈願し、千秋万歳の祝言を述べ、大地を踏みしめて土地の精霊を鎮め、除厄招福を祈念します。

能　楽　江戸時代には能楽が武家の式楽として位置づけられ、幕府や藩の公式行事で上演されるようになりました。武家の文化として能楽が発展する一方で、町人の間でも能楽を楽しむ下地が作られました。

狂言方では、慶長19年（1614）、山脇五郎左衛門源助（元宜）が初代藩主義直に召し抱えられました。以後江戸時代を通じて山脇宗家は尾張藩の庇護を受け、国内有数の流派となりました。元宜が和泉守に任じられていたことから、幕末以降には和泉流という名称が一般的となりました。

幕藩体制が崩壊すると尾張狂言界はその勢いを失ったかにみえましたが、井上菊次郎（仏具商）、伊勢門水（旗商）、河村鍵三郎（酒造業）など和泉流門下の弟子達が団結して明治24年（1891）に「狂言共同社」を結成し、名古屋の狂言を伝えました。

平　曲　平家物語を琵琶の伴奏で弾き語る平曲は、尾張藩において初代藩主以来、大いに好まれました。明和8年（1771）、9代藩主宗睦の招きにより、京都で波多野流と前田流を修めた荻野知一検校が名古屋に移り住みました。荻野検校は、5年の歳月をかけて安永5年（1776）に『平家正節』36巻の大著を完成させました。

舞　踊　名古屋では現在も舞踊が盛んで、「在名五流派」（赤堀流、工藤流、名古屋西川流、花柳流、藤間流）による講演会が開催されています。天保12年（1841）に、江戸から名古屋に移り住んだ初代西川鯉三郎は名古屋西川流を創設しました。昭和15年（1940）に二世家元となった二代西川鯉三郎は、演劇性を取り入れた「名古屋をどり」を始めました。

茶　道　尾張茶道の礎を築いたのは、初代藩主義直といわれています。城内に古田織部の意匠により猿面茶席を移築し、御数寄屋方を設置し茶人を召し抱えました。特に享